



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネルディスカッション（II）沿岸域から始まる環境保全：海岸ゴミから生態系まで
Author(s)	敷田, 麻実; 小島, あずさ; 松本, 清次 他
Description	第14回シンポジウム報告. コーディネーター: 敷田麻実、パネリスト: 小島あずさ、松本清次、三浦到、山崎達雄
Citation	沿岸域, 14(2), 15-21
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34939
Type	journal article
File Information	1169.pdf



パネルディスカッション (Ⅱ)

テーマ 沿岸域から始まる環境保全
－海岸ゴミから生態系まで－

コーディネーター：敷田 麻実 (金沢工業大学環境システム工学科助教授)

パネリスト： 小島あずさ (クリーンアップ全国事務局代表)

松本 清次 (国土交通省近畿地方整備局神戸港湾工事
事務所長)

三浦 到 (網野町企画振興課長)

山崎 達雄 (京都府企画環境部環境政策監)

・敷田 麻実

今日は身近な海岸ゴミの問題から海洋・沿岸域の生態系の問題まで、我々はどうのように対応していけば良いのか検討していきたい。

現実の海と理想の海の差は一体どうして生じているのか、どこがその差につながっているのか。どういことが沿岸域で問題になっているのか端的に somewhereからスタートしたいので、まずパネリストの皆さんに海に対する思い入れを語ってもらいたい。

パネリストの海に対する思い入れ

・三浦 到

子どもの時から海に親しんだ。昔は、砂浜もひろ

くソフトボールなどもやっていた。春夏秋冬、海が生活の一部になっていた。現在も琴引浜の鳴き砂などの保存にも関わっている。昔のようなきれいな砂浜、海岸を取り戻したいと思っている。

・山崎 達雄

小さい時に海岸で砂遊びをしたことがあるが、その海岸も現在は護岸で固められ、降りていくことが近づくことができなくなっていた。海が遠い存在になっている気がする。なごみを与えてもらう世界であってほしいが、そのためには安全な仕掛けをつくってほしい。海を社会的に利用する方法をすすめながら、海を取り戻す方法を考えたい。



・小島あずさ

東京の真ん中で育ったため、関わりは少なかった。小学校のころ行った神奈川の海で、初めて桜貝を広い、とても感動した思い出がある。海辺にいくと気持ち安らぐなど、渚がもたらす海の効用をもう一度見直してほしいと思う。海岸にゴミがないほうがいいという単純な気持ちから現在、活動を行っている。

松本 清次

幼いころより沿岸部の開発により、町が活性化していく様を見てきた。大学時代から海を開発し、利用することを勉強し、仕事にもしている。海を利用して、人々が豊になってきたが、それによって環境に負荷を与えてきたことも認めざるを得ない。その失ってしまった環境を、人の手をいれて取り戻す必要がある。生態系や環境と開発を調和させていくことが必要である。

海岸のゴミ問題

・小島あずさ

ゴミから問題提起する。誰かが不法投棄したわけではなく、流れてきたゴミが漂着して、片づける人がいないひどい状態になっている海岸がある。また、入り江の中に流れてきたプラスチックのゴミが層になり漂着して打ち上がっているが、断崖を降りていかなければいけないので、回収したゴミを陸に揚げるのが非常に困難な場所である。ゴミの問題をなんとかしたいと思っても、回収に行くことも、回収したものを処理することも非常に困難な状況である場所もある。これは特別な事例ではなくて、日本の至る所に同じ様相がある。

鹿児島種子島では、海の上で使われている漁具の発泡スチロールの浮きなどが海岸の強い紫外線や波や風によって劣化して、どんどん細くなり、まるで雪が降ったように発泡スチロールだらけの海岸になっているのである。これは、特異な例ではなくゴミ拾いというのは日本の至る所でたくさん行われているが、限られた時間・限られたマンパワーでやると大きな拾いやすいものは比較的良く集めることはできるが、破片化したゴミは全て回収することは不可能であり、小さくなって見えにくくなるが、分解しないで環境中に存在しているのである。死んだ亀の胃から破片化したプラスチックのゴミが見つ



った例もある。誤飲誤食など、他の生き物への影響が大変深刻な状況になっている。飲み込んでしまうだけでなく、ゴミの絡まりという現象も起きている。

私たちはゴミ拾い運動としてこの活動をしているのではなく、生物の多様性を後世に残すという自分達の使命の元に、できることからやろうということで、ゴミを調べている。それは何が問題か、そのゴミがどこから来ているか、ということ把握して、その上で元から出さない対策を立てるための活動である。一口に海のゴミと言っても非常に根深い問題がある。

琴引浜と「美しいふるさとづくり条例」

・三浦 到

ゴミの問題は、海から来る漂着ゴミと、もう一つは陸から、つまり琴引浜に来る観光客が捨てるゴミの2通りがある。今日は陸からのゴミをどうするかというテーマでお話する。

網野町では、「美しいふるさとづくり条例」を今年の7月1日から施行した。町内を等しくきれいにしていこうという一般的なポイ捨て条例の中身と、特別保護区域というのを定めて特化して守っていく内容とがある。特別保護区域では、禁煙、花火の禁止、炊飯等の禁止という条例の中身を持っていて、それを琴引浜にあてはめている。全国でも特異な条例である。

この条例を作ったきっかけは、琴引浜には夏にたくさんの海水浴客が来るが、夏になるとすぐに砂が鳴かなくなることからである。琴引浜は1.8kmあり、その全部の浜が鳴き砂の浜で、春や秋はよく鳴くが、夏の海水浴シーズンになると途端に鳴かなくなる。

特に海水浴客の多い600mぐらいの範囲はすぐ鳴かなくなるということが続いていた。これまでは、人が大勢来て踏みつけて鳴かなくなるのだらうとあきらめていたのである。京都市の東山高校の地学部の生徒達が十数年に渡ってこの浜の漂着物の調査した結果、琴引浜の鳴き砂は、タバコの灰などが混ざると鳴き砂の音がだんだん高くなり最後に鳴かなくなることがわかった。つまり、人がそこにきて、ただ踏むだけで鳴かなくなるのではなくて、タバコも大きく影響していることが分かった。

京阪神の大学生が丹後をフィールドに研究している丹後オープンカレッジに、鳴き砂を守るような条例ができないかという依頼した。それを受けて、立命館大学の学生が、海岸で海水浴客にアンケート調査をしてくれた。「この鳴き砂の浜を守るために、禁煙にすることに賛成か、反対か」との設問に、85%以上の人が賛成であると言ってくれた。その結果を基に、地元の人たちが平成11年、12年と2年間禁煙ビーチにしようという取り組みを始めた。最初の年は、かなりの成果があったが、2年目になるとなかなかよい成果がでなかった。法的拘束力がないので、なかなか効果が上がらないという結論になった。そのことから「美しいふるさとづくり条例」を策定したのである。今年の7月1日から施行したが、海岸法の改正が追い風になった。それまでは海岸の管理権限は都道府県知事にあったものが、法改正によって、知事との協議が整えば市町村長でもできることになったのである。網野町も京都府と協議をして、琴引浜の管理権限を京都府から網野町へ移行してもらった。

今年の夏、特別保護区域に琴引浜を指定し、守っていく環境保護団体として、15年間近い保護活動の歴史がある「琴引浜の鳴り砂を守る会」を認定した。その会のメンバーが土日を中心に午前と午後1回ずつ、2-3人で海岸をパトロールし、タバコを吸っている人に条例を説明して協力をお願いした。協力をしなかった場合は、周辺の清掃をさせることや環境保護学習をしなければならないという罰則や、それでも従わない場合は、氏名公表をするという条例になっている。トラブルが懸念されたが、まったくなかった。その結果、今年の夏はゴミが激減し、タバコの吸い殻も激減した。鳴き砂も鳴く期間が長くなり、鳴く範囲も広がった。今年の夏の取り組みは成功したが、これからも続けていく必要がある。

「海岸環境整備事業」について

・松本 清次

国土交通省は、港湾の開発だけでなく海のゴミや油を拾うという仕事もやってきた。昭和48年以来、瀬戸内海、東京湾、伊勢湾を対象に、海面に浮遊するゴミ・油の回収事業を行っている。港湾区域・漁港区域は、港湾や漁港の管理者である地方公共団体が管理しているので、国土交通省は内海・内湾の沖に漂うゴミを回収している。神戸港湾工事事務所の場合は、大阪湾と播磨灘を担当していて、それぞれ1隻ずつ専用の船を配置し、職員を乗せて、平日は毎日ゴミを拾いに出かけている。その結果として1年間に1000m³を越えるゴミを回収し、陸揚げして、最終処分場で処分している。回収されたゴミの中身を見ると、木ちく片や海藻に混じってビン・缶、石油製品（プラスチックのボトルが主体）があり、木ちく片も自然のものだけでなく、家屋を潰したときの建築廃材が河川に投棄されたのではないと思われるようなものも混じっている。その他、冷蔵庫、家庭用のバスタブ、家電リサイクル法でお金を払って処分しなければならなくなったテレビ等、かなりの部分が川を通じて陸から海に流れてきたゴミである。広島にも同様の船があるが、広島湾は牡蛎の養殖が盛んであるため、牡蛎養殖から発生するゴミが相当占めている。牡蛎筏が波に洗われて、筏の材料である竹、筏のフロートであるプラスチック等である。場所によって陸の生活・産業活動からでるゴミがあり、場所によっては海そのものを生業とする人からでるゴミもある。

港湾開発の中でミチゲーションという観点から、浅場の造成、人工干潟の造成も手がけている。例えば大阪湾の中では堺泉北港の港の中に人工干潟を作った。浅場だと太陽の光が海底まで届くので、藻が生え、藻が生えれば、魚がそこで生息するようになる。今やろうとしている開発のミチゲーションだけでなく、過去数十年の開発のミチゲーションにも取り組んでいきたい。ただ、事業の効果に対してなかなか定量的に説明しにくい。したがって大変なお金のかかる仕事に税金を投入して良いのかの判断が難しい。判断材料が欲しいし、判断材料があればこれを示して応援してくれる方も増えてくるのではないかと考えている。

・小島あずさ

元々の自然にかなうものはない。自然の状態が維持できれば、それが一番お金もかからない。人間が使うためにそこを失ってしまい、その代替措置として現在はその技術が進んで人工的になっているということもある。ただそのときに順番を間違える例というのがあって恐ろしいと思う。また、「ミチゲーションしています」と言っても、元々の自然の状態に比べて面積も小さくなり、非常に大きなお金もかかって、費用対効果の点でも時間をかけられるやり方をとっていきべきだと思う。ミチゲーションのすべていけないとか、頭ごなしに白か黒かと言うようなつもりはない。

今までは良かれと思って一部の海岸管理者や技術者が一生懸命考えて努力した仕事の結果できたものが、ミスマッチだったために、折角一生懸命やったのに歓迎されないで、人が行かない海岸になってしまっている所が実にたくさんある。それではあまりに努力がもったいない。そうであれば、どういう海岸にしたいのか、もちろん安全の確保とか、どのように利用するか、費用をいかに安く抑えるかという、諸条件をクリアした上で、もっと一番地べたのところではみんなの声が反映できるような、合意形成と言われているシステム作りをやっていくべきではないかと思う。

漂着ゴミと住民・ボランティアの関わり

・山崎 達雄

京都府内で内陸部のゴミの不法投棄が多くなり、悪質化してきている。この4月に京都府は不法投棄についての取り締まりの対策本部を作った。内陸部のゴミの不法投棄は悪質であり、違法を承知でやっている。海岸漂着物の投棄の原因は何なのかをお話をしてもらいたい。それは行政だけでは多分解決できないのではないか。悪質な事例というのは、行政がきちんと取り締まりをしていくというパターンだと思うが、それ以外のもう少し幅広い活動をどうやっておこしていくのか。なかなか行政だけでは広がりをもてないので、さまざまな団体や地域の団体と広がりをもった形で進めていくのか。漂着ゴミは、比較的幅広い事柄であるが、地域だけではなかなか解決できないのではないかと思う。ナホトカ号の重油汚染の事例も、地域の中だけでは解決できない問題である。外からのボランティアの力もかりて海を

再生していったということである。連携をどうやって考えていくのか、問題を解決するためには必要不可欠と考えている。琴引浜の活動は、嬉しいし、楽しいと思う。守るべきものが「鳴き砂」とある程度ははっきりしている状況がある。

府議会で、四万十川の水質と京都府の由良川の水質とはどう違うのかと聞かれた。四万十川と由良川では、BODなどの水質基準ではそれほど大幅には変わらない。ただそこには、川に対する人々の愛着などプラスアルファの部分があるのではないか。海の保全などを考える場合、鳴き砂など、私たちが守るべき指標を地域の中でどうやって作り出していけるのかが大事である。漂着ゴミの問題も大事だと思うが、地域の中で環境への獲得目標、地域の人達が「自分達の地域はこうありたい」という指標を提示していかないとダメである。ゴミを拾うということに問題提起をするというだけに留まるのではないか。

・小島あずさ

私たちの場合は清掃運動では限界があるということからスタートしていて、拾うこと自体が目的ではなく、データを取りながら客観的に何が原因かを掴むやり方である。清掃としてやっている限りは時間が経てばまたどこからかゴミが出てくる。だからこそ原因を掴むために、どんな材質のものがどれくらいあるのか、それがどこから来たのか、誰が捨てたのが、どうしたらそれを出ないようにできるのかなど調べ、もう少し根本的な所に到達できるような工夫をしている。山崎さんが言われたような地域ごと、活動体ごとの獲得目標というのは非常に重要だと思う。琴引浜のような素晴らしい例が短期間に成功したのは、「鳴き砂の浜」というシンボリックなものが一つ効いているのではないだろうか。聞いたところによると、ナホトカ号の重油被害で、集まったボランティアが琴引浜に集中し、結果的に他の所よりも早く回復したという事実も、守りたい鳴き砂があったからだと思う。運動をしようと思う人達が具体的に自分達のビジョンとして掲げていかないと仲間も増えないし、成果に到達するのも難しいと思うので、非常に示唆に富む意見だと思う。

・三浦 到

琴引浜においては10年ほど前から、年間を通して

清掃をしている。駐車料金を取り、それを財源にして地元で人を雇い、年間を通じて美しい浜に保とうという努力を続けている。そういうことでいつ行ってもあまりゴミはない。琴引浜の取り組みを見て、他の海岸でも、自分達の海岸もきれいにしていかなくてならないという意識に変わってきた。そのような波及効果が徐々に広がればいいと思う。

・松本 清次

港の緑地を造るにあたって、市民の意見を採り入れて造った事例もある。

高砂の相生の松をシンボルにした公園がある。東播磨港の大規模開発をやる以前から高砂市は、臨海部が重化学工業地帯になっていて、市民が海から閉ざされていた。入浜権運動というのがこの町で生まれ、何とか海に出たい、海にふれあえる場所を造って欲しいと声を受けて、この港湾の緑地・都市公園の事業がスタートした。市民の声を受けた結果、物を造った後も、管理が行き届いていて、ゴミも落ちていない。後々、愛着をもってもらうためにも、今後も市民参加を得て緑地等を造っていききたい。ただ、港湾という特殊な空間の中での仕事なので、そこで市民の声を聞くときに、どこまで興味をもって参加してもらえるのかという疑念がある。無理矢理参加してもらったところで、かみ合った議論になるのかどうか、非常に不安である。基本的には市民参加の行政という方向で行政側の認識も一致しているが、その方法論のところでは行政内部ではいろいろな不安があり、どうしたらよいのか右往左往している。

・山崎 達雄

環境NGOとの話のなかで、京都府は環境NGOとパートナーシップを結ぶような状況でないと怒られた記憶がある。市民に比べて行政はある分野ではプロであると思うが、違った意味で環境NGOもプロである。少し時間をかけながら議論をし、お互いの立場を認め合い少し時間をかけ、仕事をしていくことが大事なのではないか。

・三浦 到

行政の機関の中には国・都道府県・市町村とあるわけだが、住民と一番接点があるのは市町村である。我々が国と直接話をする機会というのはそうない。国からとなると我々も身構えるが、その辺の垣根を

取っ払い、まずは市町村の職員とのつながりを強固にしてもらい、市町村職員を使い、窓口にして、住民との対話をはかっていくのが一番いいのではないか。

・小島あずさ

何かやろうといったときに、市民側と行政側が相対立していると言う前提で出発しているきらいがある。そうではなくて十分時間をかけて、椰子の木の例で言うと、椰子の木を植えようというアイデアが出てきたときに、その関係者が本当に「ここは椰子の木を植えよう」とみんながそれを選択するのであればいくらでも植えていいと思う。しかし、そういう場合は少なく、住民側に知らされたときは、椰子の木を植えるというのが決まってしまう。そこに問題がある。

この場合は学会ということでもあるので、ただ単に国・都道府県・市町村と住民ということより、みんなにとってより良いものは何かということを考える場を作るということを考えれば、対立ありきではないと思う。そのときに接着剤の役割として、専門家・学者・技術者がいる。工学や土木の世界に関しては、素人と専門家との隔たりが大きいように感じている。おそらく専門家も素人にどうやったら分かりやすく技術的な事を伝えられるのかという悩みもあるだろう。お互いがつき合っていく経験がまだ少ないのであるからこそ、時間をかけるべきだ。手続きとして説明会をして、住民代表が了承したというやり方ではなく、前段階でもっと時間をかけるというような事が必要ではないか。

・松本 清次

確かに接着剤の役割を行政の中でも議論していて、その必要性を認識し、期待を高めている。対立の構図は良くない、そこから入るべきではない、という話があったが、役所の中でも自分達是对立するつもりはなくても、市民と直接話をする、噛みつかれるのではないかとこの恐れを持ってしまっている。噛みつかれそうになったときに、なだめてくれる方がいれば、我々も出ていきやすいという心情をもった職員が多いのではないか。

質疑応答 (抜粋)

(Q) 国と地域のパートナーシップ、NPOとのコラ

ボレーション（協働）という点で、NPOとしては国からどのようなアプローチをしてほしいか聞かせてほしい。

(A) 私たちは休みの日に活動しているから、行政の方も当然休みの日に来なさいと傲慢に言うつもりはない。ただ、例えば海辺を一緒に歩くとか、現場を一度でいいので共にして、共に汗をかくというのは、お互いにとって始まりになると実感している。今は、仕事としてこの活動をしていることを幸せに思っている。仕事頭で休日出勤という感覚で行くのではなく、週末の家族サービスとして、お子さんと一緒に浜辺歩きに行くというような、視点の切り替えて垣根の半歩分は取り払われるのではないかと思う。

(A) 鳴き砂の浜の活動の事例などでは、大学の先生・専門家の意見で刺激を受け、活動が活性化されている。田舎には専門家がいないので、大学の先生や専門家ができるだけ地域に入って助言や力を貸してくれると非常に助かる。

(A) 私は官の人間だが、自分自身は勤務時間内と勤務時間外を気分的には分けて仕事をしている。勤務時間外は自分の思いであるが、環境NGOへ出かけて、刺激を受けるようにしている。行ったら楽しくなるという思いで仕事をしていかないとなかなか続かない。行政の方から行かないと駄目であり、場合によっては場をつくらないと駄目だと思っている。大学の先生というのは官の立場からいうと官と民をつないでくれる恰好の材料である。大学の先生がもっと幅広く官と民をくっつける役割をはたして欲しい。

(A) 大学にいる人間の役割何かを考え始めた。一つは、自分の専門分野について専門家の立場から解説すること、もう一つは官と民の会合があったとき、専門的な内容をできるだけ分からない人にも教えるということだろう。また、技術者倫理の教育の場を行政の中につくっていくと、協働もうまくいくのではないか。

(A) 役人が話をすると信じてもらえない時がある。行政に対する不信が歴史の中で培われている部分があるのでしょう。同じ仕事でも学者の立場から解説してもらえると、ずっと市民に受け取ってもらえる部分がある。技術者倫理については、行政の中でも人材育成に現在取り組んでいるところである。

(Q) パートナースhipを考える場合に、現時点での話の流れでは、行政側（開発側）とそれを利用していく市民側、接着剤としての大学の先生方という三極構造という話になっている。市民と一概に言っても、陸上から海岸に来て和む市民もいる。水圏の中に関わっている漁業の立場もパートナーシップの相手としてあるのではないか。

(A) 漁業者にもいろいろな人がいて、先進的に考える人はゴミ問題にも積極的に関わっているが、一方そうでない人もいる。琴引浜に漂着するゴミには、漁具も多い。船から海にゴミを捨てるという習慣がなかなか抜けきれない。海上でタバコを吸ったり、缶ジュースを飲んだりするが、それを海に捨てる。「琴引浜の鳴り砂を守る会」の会長は定置網漁業をしているが、乗組員を教育し直すのに5、6年かかったと聞く。海に物を捨てるのが当たり前だという意識がたぶんにある。漁業者も気をつけてもらいたい。

(A) 港湾・漁港の開発に関していえば、従来から漁業協同組合の方々とは密接に意見交換をしながら、進めてきた。むしろ漁業・海運といった海・港に関わっている方だけとの間で決めてきたことに少し問題があって、そこに一般市民が入ってもらうことがポイントになるのではないか。一般の市民にとってみれば、毎日乗る電車、毎日使う道路、家の目の前を流れている川と違って、海というのが縁の遠い存在であるという方が多い。それは我々の行政の結果でもあるが、とりわけ大都会では海のある街にしながら、海岸線が沖の方へでてしまっていて、その間は工場や岸壁で占められ、一般の人が立ち入る場所がほとんどない。海との縁が切れてしまっているが為に、なかなか一般の方の関心と参画を頂くことが難しくなっている。どうやれば一般市民が海・海岸のことに意見を持ち、言ってもらえるような形にもっていけるかが課題である。

(Q) 開発をするか、保全をするか、立場からではなく一個人としてこれからどういう風にそのバランスをとっていくべきだと思うか。

(A) 開発をやめるかどうかをいきなり考えるのではなくて、少なくとも開発が人間の社会・経済活動上必要であるということが明らかであれば、

その環境へのインパクトを小さくし避けながら基本的に関発はやる方向であるだろう。

(Q) 具体的に環境教育の仕組みをつくるのにはどうしたらよいか。

(A) 子供のころからの教育は、とても重要である。海からの恩恵で生活が成り立っていることなどを伝えていかなければならない。国土交通省では、出前講座という制度をつくっている。わかりやすい教材も作成しているが、全国の子供に配布することは経費的な面でも無理があるので、安価に流通させる方法を考えていきたい。

(A) 出前講座などは、市民団体が独自に自分達の得意分野を活かして、小学校の総合的学習の時間に協力するなど随分広がっている。技術者、行政、市民グループと一緒に教材作りやプログラム作りを行い、一緒に出前講座したらもっと広がりがあるはずだ。そうすることにより子ども達と一緒に勉強することもできるし、作っていく過程での意見交換もできるのではないか。

(A) 京都府の環境教育と関連して、みなさんの取り組みをどうネットワーク化して、交流できるか、ということに取り組んでいる。京都府は、地球デザインスクールというものを開いていて、どんぐりを拾いながら体験学習をしたり、小さな茅葺きの家を子ども達と一緒に作ったりなどの活動をしている。府下では、8~10ヶ所で環境教育の拠点がある。その取り組みをネットワークし交流して学びの輪を広げていく、ということ京都府は力を入れてやっていきたい。残念ながら海に関する環境教育は取り組みが不十分であり、輪を広げていきたい。

また地球温暖化の問題も、今までの議論は沿岸域がそれなりに保全されるということを前提としているが、温暖化により海面上昇するなどの地球の観点からも関心を持ってほしい。

(A) 網野中学校の一年生は必ず琴引浜の勉強をするというカリキュラムになっている。事前に「琴引浜の鳴り砂を守る会」のメンバーが学校へ

行って話をし、もう一日は生徒たちが現地へ行って清掃活動をしたり、そこで飯ごう炊さんしたりして過ごす。カリキュラムの中に取り入れられると、毎年の事になるので、非常に大きな力になるのではないか。条例も決して罰するために作ったわけではなく、琴引浜に来てもらって自然の豊かさや美しさを知ってもらうために、絵はがきとパンフレットを観光客すべてに配って理解してもらうよう努力している。最初はチラシを考えたが、チラシではゴミになることが多いと思い、多少のお金をかけて絵葉書に使えるようなものにし、捨てられない工夫をした。知ってもらうことが第一であるので、琴引浜やゴミのことを知ってもらうための努力を続けたいと思う。

まとめ

・敷田 麻実

今日ここで議論した内容は、最初は生態系に直接影響を与えるというゴミの問題であった。これは、環境を管理するという問題だった。ところが議論をすすめるうちに、それは実はゴミを捨てる人の意識やゴミを捨てる側に環境に配慮する必要があることがわかった。いわば利用を管理する必要があるということである。

ではそれを具体的に解決するにはどうすればいいのかということだが、それは現場の学習や学習の成果をパートナーシップという形に変える、また、具体的な条例に変えることである。そして具体的手段がとれれば、次はそれを推進することである。こうした学習や人間の考え出した知恵の部分にまで管理が広がっていくという、管理の発展の様子が非常によく分かった二時間半だと思う。私たちの沿岸域とのつきあいというのは直接的な生態系とのつきあいから、いわばこれからは我々自身が連続的に作り出した知恵でつきあいをしていく、最近知識科学の分野でナレッジマネジメントと呼ばれているような新たな段階へ入ってきたのではないか。